

2013年度 センター試験（本試験）国語（現代文）ワンポイント解説

第1問	問1	(オ)の「森(深)閑」が浮かばなかった受験生がいたかもしれないが、すべて文脈から熟語の意味を考えることで正解できる。基本問題である。
	問2	傍線部の「変って了った」の変化の内容を具体的に説明しているものを選ぶ。傍線部の4行後に「特権階級の標格たる太刀が、実用本位の凶器に変じた」とあるので、変化前の「特権階級の標格」を説明している の選択肢に絞れる。さらに、次の文で「こんな次第になる以前、鐔は太刀の拵全体のうちの、ほんの一部に過ぎなかった」とあり、この点にも触れているのは だけである。変化後については、「実用本位」が一つのポイントであるが、次段落で「人間は、どう在ろうとも、...平常心を、...捜さなければ生きて行けぬ。そういう止むに止まれぬ人心の動きが、...鐔に仕立てて行くのである」とあり、 はその内容も「自分を見失わずしたたかに生き抜くための精神性」とパラフレーズしている。
	問3	傍線部は「知識をもてあそぶことだけで終わること」に対して否定的な考えを述べており、それが「観念的に理解するのではなく」と では表現されているが、他の選択肢にはそのような意味は一切書かれていない。さらに、次段落の平家琵琶の話の中で「こういう音楽に乗って仏教思想は、...滲透したに違いない、と感じた」という点も、 では「説教琵琶のような、...人々の心を実感する」と説明されている。
	問4	傍線部は「鉄に生があるなら、...文様透は芽を出した」、つまり、「鉄自体に文様透を生み出す性質がある」ということであり、「自然に文様透が生み出される」という意味であることがつかめれば、 の「鉄という素材の質に見合った透がおのずと生み出され」という部分に着目できる。さらに、 の前半の「鐔の強度と軽さを追求していく過程で」については、次文の「透の美しさは、鐔の堅牢と軽快とを語り」と対応している。
	問5	傍線部は、直前の「一羽が、かなり低く下りて来て、頭上を舞った。両翼は強く張られて、風を捕え、黒い二本の脚は、身体に吸われたように、整然と折れている。嘴は延びて、硬い空気層を割る」を受けた表現である。したがって、「鳥が舞う」というところがポイントである。これに触れているのは と しかない。しかし、 では「本能に触発された金工家」というのが明らかにおかしい。 は鳥が舞う姿の美しさを「力感ある美を体現している」と説明している。
	問6	()波線部Xの「言葉だけを辿って、...拙劣な歌だ」、波線部Yの「だが、事実ではあるまい」は、いずれも一般的な見方を表しており、それぞれ「意味がない」「面白くもない」と直後で否定されており、その後で筆者の考えが述べられている。 () は「起承転結」、「結論となる内容が最後の部分で示される」が不可。 は「それぞれの部分の最後に、その部分の要点が示されていて」が不可。 の「人間と文化に関する一般的な命題」は文中で論じられていない。
第2問	問1	(ア)「愛想を尽かす」は、「好意が持てず、すっかり嫌になる」という意味。 (イ)「間が悪い」は「きまりが悪い、ばつが悪い」という意味。 (ウ)「気概」は「困難にくじけない強い意志」という意味。
	問2	傍線部直後の「こんなものの云い方やこんな態度は、...母に対する一種のコケトリイだった」に着目すると、選択肢は に絞れる。直前の「おこったような口調で呟く」とは、「勝手にするが良さ」というせりふのことであり、それは「もうお父さんの事はあてにならないよ...」という母のせりふに対するもので、 の「父の支えなど必要としないかのように強がってみせ」がこの状況に対応し、傍線部の「自信があるような顔」に結びつく。

問3	理由説明であるが、この場面の事実把握が重要。ここでは、「私はもうお父さんのことはあきらめたよ。家は私ひとりでやって行くよ」という母の決心の言葉に、「私はたあいもなく胸が一杯になった」と書かれている。この点を正確に述べているのは である。さらに、傍線部の直前では「口惜しさの余り、...常軌を脱した妙な声で口走ったが、丁度『お伽噺』の事を思い出した処だったので」とあり、この点についても は「...、短編の中に不在の父を思う温かな家族の姿を描いたことを改めて意識し、感情に流されやすく態度の定まらない自分...」と的確に表現している。
問4	心情の説明であるが、やはりこの場面の事実把握が重要。各選択肢がすべて「...のに、」で始まっており、これが109行目の「『僕の親父は何故あんなに長く外国などへ行っていったんでしょうね。』と聞いた。今更尋ねる程の事もなかったのに」に対応していることに着目する。 は全く見当はずれの説明となっている。 とが残るが、 は「本心から知りたかった」が明らかにおかしい。後半の説明から見ても、 は「母にも落胆している」、 は「叔父が...嫉妬を隠せないでいる」、 は「祖父の悲しみを思えば正面切って叔父に反発することもできず」、 は「母もまた自分の立場を守ってはくれない」が明らかにおかしい。
問5	「自分で自分を憐れような思い」の言い換えとして、 の「きまりが悪い」、 の「苦笑したい気持ち」、 の「意外な驚き」は不適である。残った とのうち、 では、「こうした事情を知らない息子」や「家庭的に恵まれなかったことを理由に」が、本文からは読み取れない。 の「地球儀が、...父への愛憎半ばする複雑な思いの象徴」であることについては、本文全体を通して「私」の父への思いとして読み取れる。「息子がふがいない自分をどこかで慕ってくれるのではないか」は、「私」と父の関係を、息子との関係に投影していると考えればよい。
問6	は、「二つの場面に大きく分けられる」が明らかにおかしい。 は12行目、90行目、114行目の会話の中に「 」が使われている。この二つが形式的な面でカットできる。残った選択肢の内容面を見ると、 の「両者に生じている隔たりを比喩的に表している」、 の「祖父の法要での前後三日間と挿入された短編中の時間との区別を曖昧にしている」がおかしいことがわかる。

2013年度 センター試験（本試験）国語（古典）ワンポイント解説

第3問	問1	<p>(ア)は傍線部自体の意味内容としては ・ ・ のいずれもありうるが、その直前部「御文やらせ給はんも、せん方のおはしまさねば」とのつながりから である。</p> <p>(イ)は「飽かざりし名残を」と尊敬語「あそばす」の用法に注意すれば、 を導くことができる。</p> <p>(ウ)は「いみじくこそ書きなしたれ」は3行前の「おもしろう書きなしたれ」と対応していること、「書きなす」の「なす」は補助動詞として用いると「わざわざ～する」の意になるという語法に注意すれば、正解の を直ちに導き出せる。</p>
	問2	<p>これは入試頻出の「ぬ」および「に」の識別問題である。aの「ぬ」は上接部が「給は」と未然形であることから「打消の助動詞」だと判り、dの「ぬ」は上接部が「賜り」と連用形であることから「完了(強意)の助動詞」だと判る。この時点で選択肢は と に絞られる。 も もbは「断定の助動詞」であるから、ポイントはcの「に」の識別である。「むべ」は多く副詞として用いられるが、形容動詞「むべなり」(連用形は「むべに」)は受験生にはあまり馴染みがない語句だろうから、少し戸惑ったかも知れない。</p>
	問3	<p>「誰が」については、傍線部Xの前に「母君」とあることから、ここで選択肢は ・ ・ に絞れる。「さればよ」は慣用句で「やっぱりなあ」「思った通りだ」「案の定」の意味であるから、ここでさらに選択肢を ・ に絞れる。 は「沈み込んでいた娘の様子を見て心配していた通り」が本文中の記述になく、 は和歌Bの前に母君が扇に書き添えた歌を見て不審に思っていること、これから正解は だと判る。</p>
	問4	<p>「今宵、殿の渡り給はんぞ。よくしつらひ給へ」という「母君」の指図を受け、「隈々まで塵を払」っている「右近」に対し、「女君」が「蓬生の露を分くらむ人もなきを、さもせずともありなん」と言っていること(傍線部Yの直前部)をしっかりと踏まえている選択肢は しかない。この選択肢の後半部「右衛門督の訪れをひそかに待っている女君の心はわかっているからとからかう気持ち」の「からかう」は、傍線部Yの直後の「うち笑へば」に対応している。また本文末尾の「いと恥づかしと思す」は「女君」の描写であるが、これは「右近」が女君を「からかった」ことによるものである。</p>
	問5	<p>正解は である。「会って愛情は深まった」「恋が成就した今になって、さらに募る恋情」はリード文を踏まえた上で和歌A中の「あひみての後こそ物はかなしけれ」に、「人目を気にするために昼間は会いに行けず」は和歌A中の「人目をつつむ心ならひに」および和歌Aの後述部「今宵は、いととく人をしづめて」にそれぞれ対応しており、和歌Bについての説明は、この和歌を正確に逐語訳したかのようなものとなっており、妥当である。 は和歌Aの説明「会う前よりも募る恋の苦しみ」と和歌Bの説明全体が、 は和歌Aの説明「ともに演奏を楽しんだのに一向に進展しない二人の仲を悲しく思い」「女君への不満」と和歌Cの説明全体が、 は和歌Bの説明全体が、 も和歌B全体の説明が、それぞれ明らかに誤っている。この設問は、A・B・Cの和歌を正確に解釈することに加えて、それぞれの選択肢の吟味も慎重に行わなければならないので、かなり煩わしいと感じた受験生が多かっただろうと推測される。</p>
	問6	<p>「右衛門督」と「下総守の娘」の互いの「思い」は、和歌A・B・Cに託される形をとっており(問5)このような「二人の秘めた思い」を知った「母君」と「右近」とがそれぞれ重要な副人物として描かれている(問3および問4)。これに対して「下総守」と、「文の使い」をさせられている「弟君」とは、「二人の秘めた思い」に気づかずにいる。これを踏まえた が正解である。</p> <p>なお、他の選択肢は以下の部分が誤っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> 『蓬』などの自然の描写」および「東国のひなびた情趣と女君のみやびな風情が対照的に描かれ」 「敬語を重ねて高い敬意を表す表現が 右衛門督にのみ用いられ」「試練が待ち受けている」 「周囲の『人』に認めてもらうことを恋の成就の重要な条件と考える右衛門督たちの心」 『唐琴』『小犬』『香箱』に添えて贈り合う歌」の「小犬」(ここは正しくは「扇」とあるべきところである)。

第4問	問1	<p>同じ意味の漢字を含む熟語を問う問題である。選択肢の「語」の意味判断が難しい。まず、傍線部の「本文中での意味」を考える。</p> <p>(1)は「手づから」と読み、「自分の手で」の意味である。同じ意味の「手」を含む熟語は「手記(=自分の手で記す)」である。</p> <p>(2)は少々難解である。文脈から「(美酒を)取り寄せて集める」の意味となり、同じ意味の「致」を含む熟語は「招致」である。</p> <p>問2 傍線部から読み取れる筆者の心情を問う問題である。傍線部を訳してみると「時宜を得て降る雨がしばしば降り、海棠は盛んにしげり成長しているのだ」となり、肝心の筆者の心情は記されていない。しかし、選択肢を吟味してみると、すべての選択肢の前半部分は「海棠」の様子が記されていることがわかり、ここに傍線部を当てはめると が×になる。また の「今年の豊作」については、本文のどこにも記されていないので×。これで ・ ・ に絞り、選択肢後半の筆者の心情を検討する。 では「生活に満足」、 では「生活に退屈」、 では「前途への不安」となっている。傍線部Aの後で「花見」で美酒を飲むことを楽しんでいることから が正解となる。</p> <p>問3 選択肢を吟味してみると、前半部分は筆者が左遷されることが記されているが、傍線部の内容解釈には該当しない。選択肢の後半がポイント。傍線部Bを訳してみると「不復」は部分否定で「二度と～ない」と訳し、傍線部B全体で「二度と花を省みる(=見る)ことはない」となる。これを訳出している が正解となる。</p> <p>問4 傍線部Cの内容(時間)を問う問題である。選択肢から筆者が左遷された時を基準として考えていく。傍線部Cの前行(4行目)で筆者は左遷され(注8に明記されている)傍線部Cの直前の「周歳」がヒントとなる。「周」とは「期間の一単位」であり、「周歳」は「一年」の意味になる。傍線部Cの後に記された「寺僧の書」では「花が咲いた=春」の記事であるので、正解は「左遷された翌年の春」が正解となる。</p> <p>問5 返り点と書き下し文を問う設問である。選択肢の書き下し文を見ると、「与」の読み方、「楽」「欲」の語順が問われていることがわかる。「与」の読み方は「と」が頻出であるが、この問題も書き下し文を訳して考えると、 ・ 「と」しか意味が通らない。語順であるが、特に句形もないので、傍線部Dの後と意味が通じる内容になる語順を選ぶと が正解となる。</p> <p>問6 解釈の問題は句形・語句が問われている。選択肢の後半「如此」はすべて同じ解釈なので、前半部分に注目する。「事之不可知」は「事の<u>知ることができないのは</u>」と訳すことができるので、 が正解となる。</p> <p>問7 書き下し文と解釈の組み合わせである。書き下し文は問5と問7と2問出題されたことになる。選択肢の書き下し文を見ると「安～」を「いづくにか～ん(=どこに～か、いやどこにも～ない)」と読むか、「いづくんぞ～ん(=どうして～か、いや～ない)」と読むかが問われている。傍線部Fまでを解釈してくると「どこに」と訳すことはできない。傍線部Fは文章の末尾で筆者の主張をまとめていることから考えても「いづくんぞ～」と読むことがふさわしい。さらに「安」を反語として捕らえると、文末は「～んや」となり、これで選択肢 ・ に絞る。 ・ を比べてみると、「此花」を「此の花」、「此に花の」と読んでおり、どちらか迷うが、解釈から考えて「この花」と読むことが適切である。</p> <p>問8 文章全体の筆者の心情を問う問題である。文章全体、と考えると難しいと思われるが、これまでの設問解答の経緯から考えていけば正解を導くことができるのがセンター試験の特徴である。</p> <p>問2 筆者は寺院での心静かな生活に満足を感じている。</p> <p>問3 筆者は政変に際して黄州に左遷され、それきり海棠の花を見ることがなかった。</p> <p>問6 これから先に起こる事を予測できない。</p> <p>問7 どうしてこの花が思いがけず私の目の前に存在することがないと分かるだろうか。(いや、分からない)目の前に存在することもあるはずだ)</p> <p>問8の選択肢を吟味すると、以下の部分が本文に記されていないので×。</p> <p>「宗教的修行を積んだ人間への敬意を深め、～思い直している」</p> <p>「花への執着を捨てられない自分を嫌悪し」</p> <p>「人々から交際を絶たれるという体験を通して人を信じられなくなった」</p> <p>「現状から早く脱出したいと思いつつも何もできない」</p> <p>特に文章末で筆者の意見をまとめている問7に注目すると、 が正解となる。</p>
-----	----	---